

横浜市会第3回定例会 一般質問より

横浜市会議員 山崎 誠（民主党ヨコハマ会）

3 高齢者が生きがいを持って暮らせる街づくり

高齢者が生きがいをもって暮らせる街づくりについて伺います。

本市の高齢者人口は、団塊の世代が高齢期を迎える平成26年には現在の61万人から85万人に、高齢化率も17%から22%を超えるものと見込まれております。いわゆる超高齢社会の到来が目の前に迫っています。

今後とも横浜が活気のある街であり続けるためにも、高齢者が、元気で、生きがいのある生活を送ることができるような社会を築いていくことが、今まで以上に、重要であると考えています。

そこで、まず、

(1) いわゆる超高齢社会の到来を控え、横浜市の高齢者福祉施策における課題は何かお伺いします。

本市が平成16年度に行った高齢者一般調査によりますと、要介護状態に陥ってしまうリスクの中で、外出や若い世代との会話がないうなど、社会との接触という点に関するリスクを抱えた方が、47%という高い比率で存在していることが明らかになっております。

この結果を見ますと、高齢者が、元気なうちから社会との関わりを保ち続け、生きがいのある生活を送ることが重要であるといえます。そうすることにより、閉じこもりなどを防止し、要介護状態となるリスクの芽を摘むことができ、自立した生活を長く続けていくことが可能となります。

そこで、

(2) 超高齢社会を考えますと、元気な高齢者の社会参加、生きがいづくりといった視点が重要になってくると思いますが、市長のお考えを伺います。

高齢者が増えてゆく中で、心身機能に問題がなくても、生活面に不安を抱える高齢者の在宅生活を支えるために、日常生活の様々な場面でのきめ細かな支援が必要となってきます。

このような個別のニーズは公的サービスに馴染みにくく、ボランティアの果たす役割が大きくなっていくものと思います。

そこで、

- (3) 本市でも相当数のボランティアが活動していますが、今後、このような方々と自宅で暮らす高齢者の日常的な支援ニーズをつなぐために、どのように取り組んでいくお考えか、伺います。

また、高齢者の様々なニーズに応えるためには、幅広い世代のボランティアの担い手が必要です。元気な高齢者がボランティアとして支援に回るような体制を作ること、また、中高生などの若い世代がボランティアへ参加できる仕組みをつくることは、その教育的な意義も含めて、とても重要であると考えます。

そこで、

- (4) 中学生や高校生の地域でのボランティア活動の拡大を図る取組についてどのように考えているのかお伺いします。

自宅で暮らす高齢者が、不安なく、生きがいを持って充実した生活を送ってもらうための、地域で支える仕組みづくりについて、これまでいろいろと調査を続けてまいりました。

ちょうど在宅高齢者の生活を支援するシステムが、北海道富良野市、千葉県浦安市で、稼動していることを知り、実際に使用している方々、お年寄り、ボランティア双方のお話を聞いてまいりました。

そこでは、一人暮らしのお年寄りのお宅にインターネットに接続できる端末を設置し、毎朝の安否の確認、話し相手や買い物、掃除の手伝いなどお年寄りの様々なニーズに対して、簡単な端末操作により、引き受けてくれるボランティアを自動的に探し、携帯電話へのメール配信を行ってくれるといったシステムが導入されています。

お年寄りには、地域で見守られているという安心感を与え、声かけやちょっとしたお願いごとを通して地域との結びつきを持つことを可能にしています。また、ボランティア側については、自分の都合のつく時だけ手を貸すことができ、そうでないときには遠慮なく断ることが許されるシステムのため、ボランティアの垣根を低くし、裾野を広げるのに役立つものになっています。

富良野市では高校生のボランティアがこのシステムに登録し、お年寄りとの交流を深めています。無機質に思われがちなシステムですが、使い方次第で、「人」と「人」との心を結ぶ役割を十分に果たすものであることが実証されているよい事例でした。

両市とも、ここまで来る過程で様々な課題がありましたし、現在も、課題を残したまま運用しているのが実態です。自治体には、規模の大小、地域特性など様々な要素がありますので、同じシステムが本市で効果的かどうか、十分に検討する必要があります。しかし、情報技術の福祉分野での活用事例として大いに参考になるものと考えます。

本市にあっても、地域に広がるボランティアのネットワークが高齢者を支える仕組み、また、地域で世代を超えて支えあう「地域三世同居」を可能にする仕組み、システムづくりを検討いただくことを強く要望いたします。